

2015 年度

筑波大学大学院人間総合科学研究科心理学専攻博士学位論文

絵本共同読み活動における

自己への誤帰属と相互作用

筑波大学大学院博士後期課程

人間総合科学研究科心理学専攻

学籍番号：200937024

氏名：太田礼穂

要約

近年、大人との共同活動を通じた子どもの学習を捉える観点として、共同活動の中で行なわれた大人の行為を子どもが「その行為を行なったのは自分だ」と誤想起する現象、自己への誤帰属が注目されている。先行研究では、共同活動を通じて学習が成立するとき、子どもが行為主体を自己へ誤帰属する傾向があることが報告されている。しかし、共同活動中のどのようなやりとりが誤帰属の生起に関連しているか明らかになっていない。そこで本論では、自己への誤帰属とやりとりの内容及びその特性との関係を明らかにするため、発話と発話連鎖の詳細に関するやりとりの微視的分析を行なうことで、学習のメカニズムにアプローチすることを目的にした。

本論文は 5 部で構成される。

第 I 部では先行研究の知見を整理し、本論の研究課題ならびに目的について述べた(第 1 章・第 2 章)。ここでは先行研究が等閑視してきた共同活動での子どもと大人の発話ややりとりからアプローチする必要性を指摘し、そこから共同を通じた学習と自己への誤帰属の関係を検討する必要について述べた。

第 II 部から第 IV 部では計 7 つの研究を通じ、絵本の共同読み活動に関する実験場面の設定および相互作用の分析を行なった(第 3 章から第 9 章)。

第 II 部では、先行研究で扱われた課題を追試し、そのやりとりを分析することを通じて、これまでの研究が看過してきた側面を明らかにした。

第 3 章では、家具配置課題の追試を通して従来の研究の問題点を指摘した。発話内容の分析から、子どもは大人の働きかけ全てに同意しているのではなく、自分なりの観点をいながら家具配置の共同活動に参加していたといえ、子どもと大人のやりとりを微視的に分析する必要性を確認し、どのように共同活動場面を設定すべきかについての方向性を得た。

ここより本論では幼児が絵本のテキスト内容を大人と一緒に理解する絵本共同読み活動を検討することとした。

第 III 部では、絵本共同読み活動を実験的に検討するにあたり、共同読み活動で大人は子どもの絵本のテキスト理解をどのような観点から捉えているかを把握した。これについて検討した第 4 章と第 5 章では、絵本の読み聞かせ場面で保育者や保護者がどのような発話や行為から子どもの読みの“理解”を捉えているかの語りを分析し

た。結果、絵本共同読み活動での大人は、子どもの読みの“理解”を捉えるために子どもが理解していると積極的に仮定し、子どもに働きかけることを通じて、子どもの“理解”を探り出そうとしていることが示唆された。

第Ⅳ部では、絵本共同読み活動における子どもの学習と行為主体の誤帰属について実験的検討を行なった。

第 6 章では、発話内容・発話機能・沈黙秒数・文節数などから子どもと大人の相互作用を微視的に分析し、やりとりの内容が自己への誤帰属の生起に及ぼす影響を検証した。分析の結果から 2 点が明らかになった。ひとつは、子どもと大人の間でやりとりに齟齬が起きたり、しばしばやりとりが中断したりするときには自己への誤帰属は生起しにくいこと、もうひとつは、大人から登場人物の気持ちに関する働きかけがあり、それに子どもが具体的に応答し発話連鎖が成立したとき、自己への誤帰属は生起しやすいことである。登場人物の気持ちに関する発話連鎖は必ずしも成立していなかったことから、大人の働きかけの内容は子どもにとって難しすぎる内容でもなく容易すぎる内容でもなかったと考えられた。ここから、子どもにとって発達途上にあるような読みの認知過程を「自分のもの」として捉えることで絵本読みの学習が起こり、同時に自己への誤帰属が生起するという仮説を提案した。

この仮説を検証するために第 7 章では理解すべきトピックの難易度から子どもと大人のやりとりの質的な違いを分析し、小学校 3 年生と年長児では、出題された問いへの容易さだけでなく、大人とさらに話し合うときのインタラクティブなやりとりに質的な違いがみられることを明らかにした。

第 8 章では、年長児にとって理解すべきトピックが易しい共同活動を設定し、自己への誤帰属と学習の関係について検討した。結果、大人から登場人物の気持ちや外的特徴について具体的な働きかけがあった共同活動に参加した子どもは、そうでない共同活動に参加した子どもよりも、共同後の答えの改善がみられ、大人の具体的な働きかけは子どものテキスト理解に寄与していたが、いずれの共同活動でも自己への誤帰属傾向はみられないことが明らかになった。

第 9 章では、第 7 章の小学生に関する知見ならびに第 8 章の知見をさらに検証するために、易しい活動内容のときに大人との協力を価値づけ、共同の目的を明確化したときの自己への誤帰属と学習の関係を検討した。結果、大人の働きかけが価値づけられ、共同の目的が明示されていても、それが子どもにとって発達途上にある

ような読みではなく、能動的な応答によって成立しないやりとりのときには、子どもは大人が提案した読み方を「自分のもの」としないことが示唆された。

第Ⅴ部では総合考察を行なった。第10章では自己への誤帰属とやりとりとの関係をふまえ、これまでの議論を総括した。やりとりとの関係から、子どもにとって発達途上にある読みが大人とのやりとりの中で可能になるとき、自己への誤帰属は生起しやすくなることが示唆された。この発達途上にある読みは大人の働きかけだけで機械的に成立するものではなくインタラクティブな過程の中で成立するものであった。これは保育者や保護者が子どもの読みの“理解”を仮定し、相互作用のなかで子どもの“理解”を捉えようとする点とも符合すると考えられる。すなわち、「頭一つ抜けた」存在に子どもが成るような社会的完成活動（Holzman, 2009, Newman & Holzman, 1993）が大人と子どもの間で創り出されていった結果、子どもは発達途上にある読みを「自分のもの」とし絵本読みの学習が生起していたと考えられた。